

二〇一五 年度

J₁ 国 語 問 題

注 意

- 一、試験時間は五〇分です。
- 二、「はじめ」の合図があつてからページを開くこと。
- 三、解答用紙に、受験番号・氏名を記入すること。
- 四、解答する文字はくずさず正確に書くこと。
- 五、字数制限のある問題については句読点を字数に含めること。
- 六、解答用紙のみ提出し、問題用紙は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、「」は語句の意味で、解答の字数に含めないものとします。

すべてのものの利益がそこでは一致する何らかの点がないとすれば、どんな社会もおそらく存在することはできないだろう。(ルソーの言葉)

コミュニケーション、とりわけコミュニケーションの不具合が問題になるのは、「社会」においてです。ある一つの(一つだけ)である必要はないのですが、少なくとも最低一つの(利益の一致点があるのが社会ということなら、その社会で、その一つの目的に関してのコミュニケーションがとれないとなれば、一大事です。

群れの目的は、大きく言ってしまうえば、その種族の保持、あるいは、自分たちの群れの保持ということになるでしょう。

B、猿の群れには敵をすばやく見つけ、仲間知らせる見張り猿がいるといわれています。その見張り猿の、危険なものが近づいているという警戒警報がみんなに通じなくなったらどうでしょう。とんでもないことです。何のために群れているのか、見張りを立てているのか、意味がなくなってしまう。

なのになぜ、いま人間の社会ではコミュニケーションが問題になっているのでしょうか。しかも、うまくコミュニケーションがとれるためになどという講座があったりします。

猿が危険信号を発するとき、「ギャア」であろうと「キャッキヤ」であろうと、短い音節【注1】であることが想像されます。それに対して人間は、とても礼儀を重んじますから(？)、どうぞとか、よければとか C 単語まで入れていてわかりにくくしてしまっているということも考えられます。もちろん、危険の警告の際には、人間だって、そうそうそんな礼儀を重んじる言い方はしませんが。

あの哲学者のヴィトゲンシュタインの『哲学探究』という本に出てくる例は、猿と同じくらいぶっきらぼうな例です。建築現場で、大工の棟梁【親方】が「Brick」と叫び、弟子が即座に石材(Brick)を差し出すのです。どうぞ、とか、よろしければなど

一切抜き。とつてくれという動詞ありません。「ギャ」と同じくらい短いBrickです。この二人は、この一音節で、見事な連係プレイを見せました。

ですが、一音節を叫んだので成功したというわけではないのです。これは、たまたまこのとき成功しただけなのです。決して、いつも期待できることではありません。暑い日盛りで、弟子が一瞬ぼんやりしてしまい、単語を聞き落とすということもありえるのです。たるんだ空気をよみがえらせるために、親方は、もう一度、語気も荒く怒鳴りなおさなくてはならなくなります。また、たまたまその日が弟子の二歳になる坊やのお誕生日で、帰りに何かお祝いを買っていこうと思っているかもしれません。そうなると彼はこの単語を聞いて思わず積み木(Brick)を思い浮かべてしまうでしょう。

猿なら成功することが人間の場合こうもこんがらかってしまふのはなぜでしょうか。猿が群れているのは、少なくとも、「身の安全を図り、ひいては種の保存に貢献する」ためでした。もちろん人間だって、プロタゴラスが言ったように、「人間という種が絶滅しないために、人間に群れるすべ【方法】を神様が与えてくれた」わけですから、第一義的には、あるいは、はじめは、猿と同じことを目的としていたでしょう。でも人間の場合、それとまっていなかったのです。

たぶん、すべては「もつと」を目指す人間の精神のおかげです。「もつと」とは、ギリシャ語の pleonexia(より多く持つこと)でした。比較級で書かれているのですから、だれかよりもつとと言うことになります。あるいはだれよりもつとかもしれません。あるいは、必要な、または当然であるものよりもつとかもしれません。そこでこの単語には欲張りという訳語が当てられたりもします。かなりどうしようもない単語です。でも、「もつと」にはもう少しましな意味もあります。昨日の自分より今日の自分は「もつと」たくさん、とか、明日の自分は今日よりもつとというのも考えられます。これだって、なんて欲張りなと言えませんが、もう一面では、人間の D 心を表しているとも考えられます。いずれにしろ、人間行動の基調になっている言葉です。

「もつと」を考慮に入れると、いまここでの、素のままの安全だけが確保されればいいということにはなりません。今後ずっと安全とか、かつこよく安全とか、いろいろ副詞がついてくるのです。その上、「もつと」をきっかけに、安全を図る方法も多

様に思いつくようになりました。「ギヤ」の一言で、逃げるという単純な話ではなくなつたのです。逃げるとしても、前を向いてか、後ろを見ながらか、「E」の子を散らす」ようにか、あるいは、ある特定の部分は逃げると見せて聞うとか。だとすると、「ギヤ」II「逃げる」という簡単な話ではなくなつたのです。「えっ？　で、今日は、そして私は、どうすれば？　……」。

このままでばらばらになつてしまつたら、それこそ人類の、あるいは、せつかく作つた社会の崩壊を招きます。そこで、危機感を持った人たちが、あわててコミュニケーションの回復を図っているわけです。でも、それまでは、コミュニケーションなんてそれなりにとれるものよねと余裕で考えていたのはなぜでしょう。

最初の共同体として家が生じる、家が集まつて、最初にできた共同体は村であり、……それら共同体の最終目的は国である。(アリストテレスの言葉)

アリストテレスのいうところによれば、最初の社会は、だからこの言葉で言えば、最初の共同体は家庭なのです。もちろん彼の考えている家庭は、いま私たちがすぐに思いつく家庭、親子四人とか、三人とかいう小さな家庭とは少し違います。成員として、「食卓を共にするもの」「飯櫃を同じくするもの」などと言ひ換えられているように、かなりの大家族をイメージしているようです。労働力としての奴隷(何しろ古代ギリシャのことですから)、労働力としての牛(古代ギリシャのことですが、牛と食卓を共にするとは考えられませんが)もどうやらその成員のようですから、規模も違います。でも、共同体のはじまりは家庭だというのは納得できます。私たちは、望むと望まないにかかわらず、ある家族の成員として生まれ落ちることになっています。

この、生まれるや否や所属することになる最初の共同体ほど、新参者に心を配るところはほかにはありません。新参者の泣き声や、手の動き、顔の筋肉の緩みに一つ一つ納得し、意味をつけ理解しようと古参者が心を砕くのです。だから、新参者を迎えたこの共同体がスムーズに流れていけるのは、この古参者の努力と新参者の主張の単純さのおかげです。おながすいた、おしめがぬれている、新参者がことのほか強く主張するのはこの二つです。もちろん、こわい夢を見て泣くとか病気に取り付かれて苦しいとかありはします。でも、多くは空腹と排泄の訴えですから、古参者はとりあえずその二つをたしかめてみて、どちらでもない場合に、例外的な主張を考えれば、新参者とのコミュニケーションは見事にとれるということになります。

もつとも、この共同体でさえ、新参者と古参者の蜜月【友好関係を保っていること】はそうは続かないかもしれません。夜泣きというのがあるからです。夜になると、赤ちゃんが泣き出すのです。赤ちゃんの声は猫の声以上に人の心を騒がせます。その上、泣いている理由がまったくわからないのです。すべての場合を想定して、それに従つて処置して、それでも泣き止まないとしたら、古参者たちはおろおろするしかありません。まして隣近所が近いとしたら、その上それが毎夜のことだとしたら、泣きたいのは古参者のほうです。赤ちゃんを負い、抱き、ゆすり、あやし、小さく子守唄を歌い……。

あの単純な二つのわけ以外の、しかも推測不可能なわけで泣かれるのは、つらいものです。病気でむずかっているほうがまだ気が楽なのです。相手の言っていることの意味がとれないというのはこんなにもつらいことなのです。このあたりから、私たちはどうしたら相手の言おうとしていいることがわかり、こちらの意図も伝えられるかという問題に悩み始めるはずで

ところ、してほしいことが多くなると、言葉の習得と、どちらが原因で結果なのかは別として、その二つはほとんど平行して起ります。新参者も泣き声はやめて、曲がりなりにも【どうにかこうにか】言葉「うまうま」とか「にやあにや」とかを古参者に向けて発するようになります。この段階では古参者もただ闇雲に新参者の意図を探るのではなく、「うまうまほしいの？」と言葉を発し、哺乳瓶の中のミカンジュースを見せて「これかな？」と聞いてみたりします。首を振つて拒絶を示せば、古参者は別の「うまうま」を取り上げて見せることになるでしょうが、こうして新参者は、言葉の基本的役割である「F」表現を覚えるのです。それ以降、両者のやり取りは圧倒的に言葉に依存することになっていきます。

でも、そうなればなるほど、的確に相手の言いたいことをつかむのが難しくなります。子どもの「おやつー」は何を差し出せ

ばいいのかわからない言葉です。仕方ないので「何がほしいのよ」と聞いて「あれ、あの僕の好きなつめたいの……」という答えが返ってきた日には、忙しく食事の支度をしてる親は、腹が立つでしょう。

そもそも言葉というものは、

1

① 的なものなのです。そして、してほしいことは

2

② 的なことです。「背中搔

いて」という言葉でも、決して 2 的ではありません。本当はだれの背中かも知りませんし、広い背中の中のど

を、どう搔いたらいいのかだつてわかりません。「強くね」といわれて爪でも立てれば、「なによ、痛いわね」になる危険もあり

ます。もちろんだからこそ、自分の思うように思う箇所を搔いてもらえると感動するのですが。

欲求対象が増え、伝達内容が増え、そして言葉がましていけばいくほど、両者のわかりあいは難しくなっています。いままであんなに滑らかに、穏やかに行なっていたコミュニケーションはどうなったのでしょうか。やがて、「親なんて何もわ

かってくれない」「うちの子何を考えているのかわからない」とばやくことになるのです。

⑥

これは原則として新参者であつた子どもに非があります。新参者といつても、もうずっと以前の話です。近ごろでは、集団のだれよりも大きい顔をして家中を闊歩【大またで雄々と歩くこと】しているではないですか。その上、集団で大事な

のは、力あるものがないものをおもんばかる【心を配る】というところでした。たいていの集団では、新参者がおずおずとし

て、場になれない分だけ力を発揮できないでいます。その限りで、新参者を大事にしている家族集団は正しいあり方をしてい

たのでした。でも、この集団は、逆転現象を起こすのです。年が経つにつれて、知力体力とも、昔新参者だった「わが子」が優

位に立っていきます。そのところ、子の側ではしつかり見極めなくてはいけません。自分のほうが優位に立ったなと感じた

ら、今度は自分が、集団維持のために、コミュニケーションをスムーズに進めるために、努めなくてはいけないのです。それ

をいままでの癖が抜けないまま、やっぱり年取つた親が努めてくれると思ひ込むのは、ただの甘えです。

もちろん、逆転の間には、均衡【つり合い】関係の成立している期間もあるはずで

す。甘えつばなしだった子どもとしては、

この期間に、親に代わつて集団維持の責任者にならなくてはという覚悟を育ておく必要があるのです。

この家が集まってできるのが

G

⑦ ということになるのですが、家が多数集まった

G

でなくてもいいのです。

たつた二軒の家を想像するだけでも、コミュニケーションがややこしくなっていくさまは見取れます。コミュニケーションの一番もとをなしている単語一つとっても事情は明らかです。

私のコミュニケーションの第一段階である家庭は、もう大昔のことですが、東京の山の手のインテリの家庭でした。当時の女性として最高の教育を受けたと自負していた母のもと、私は母のかもしれない霧囲気の中、他の家人とのコミュニケーションも果たしてきたのです。ある意味で、母の言うことは「間違いない」ことでした。

事のはじまりは、ほんの小さなこと、「おもちゃ」という単語のアクセントのことでした。母は、「お」を強く発音しました。当然、私もそう言いましたし、家の中では、お手伝いさんに至るまでそう発音していました。気づいたのは、友達の家に遊びに行ったときでした。友達は「も」にアクセントを置いていたのです。それ変だよという私に、友達の親も出てきてそれぞれに口に出してみても、私の発音のほうがおかしいよと言ひ出したのです。それでも遊び続けていたのか、遊びをやめて早々に帰ってきてしまったのかは、記憶にありません。何しろ半世紀以上も前、四、五歳のころの話です。でも家に帰ってきて早速母に聞いてみたのは覚えています。どちらが正当なのかです。もちろん母は自分が発音していたほうを正しいのだとしました。「あちらのお家ならそうかもしれないけど」。母は、そのあとも、私が「も」にアクセントをつけて発音するたびに、「違う」といつて妙な目つきをしたのです。でも、お友達のおうちや、学校では、私のうちの発音は受け入れてもらえませんでした。⑧ この件は、「あちらのお家」のほうが、正当な標準語だったのです。でも私にとつては、どちらが正当かはもうどうでもよ

かったのです。どちらの共同体でも白眼視【人を冷たく見ること】されな

いたため、幼い私は逃げ道を見出したからです。簡単な

ことでした。「おもちゃ」という単語を使わなければいいのです。

「二つの共同体に挟まれて」というこの経験は初めてのものでした。そのせいか、この単語を使わないという私の決意は身についてしまいました。後に母親になったときも、子どもに向かつて「そこに散らかしてあるおもちゃを片付けなさい」という代

わりに、「そこに散らかしてある本や積み木やミニカー、元にもどしておきなさい」と言っていたのです。

正しい解決法は、いろいろの例をあげて自分の親を説得することだったでしょう。あるいは、どちらの家で「おもちゃ」とい

うかによって、アクセントを的確に言い換えるという手もありました。でも、ものぐさな私は、私にふさわしく、一番ものぐさな道を選んだのです。これは私の人生の他の面にも影響しました。英語で発音しにくい単語にぶつかると、同じ意味の、もう少し発音しやすい単語を探しだし、それに固執する【こだわる】ことにしたのです。これは自分には絶妙な技だと思えたのですが、そのおかげで、難しい発音を練習し、しゃべることができるようになるという、英語上達の機会を逸し【のがし】ました。

とにかく、どのような方法をとるにしろ、一度家から出たときには、コミュニケーションをとるために、家にいたときにはしなかった苦勞をしなくてはいけないということなのです。これが、たくさんの子が集まる学校という共同体になれば、当然困難は増えます。どこの家の（言語）習慣にくみすればいいのか、言葉に限っているならば、当分口をきかないで周りの様子をじっと見ていたほうがいいのかもありません。でも、あまりにも慎重になりすぎて、結局大学の四年間、一度も積極的に口をきかないで終わってしまった（に違いない）という学生を知っています。いま時分、自分にふさわしい共同体を見つけて、そのみんなと軽やかに会話を楽しんでいるといいのですが。「私のいた大学ってひどいところで、だから四年間一度も口きいてやらなかった」などとおしゃべりしてくれていると空想するだけで、私の心はとても軽くなり、うれしくさえ思えてきます。

その家が大量に集まって G となり、 G が集まって国になるとすれば、国の中では話はもつと通らなくなります。でも、そこで嘆いていても始まらないのです。実はもつと厄介な場面があるからです。国と国の付き合いです。

私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳的法則。（カントの言葉）

自然科学の分野でも業績のあったカントが、星空そのものに感嘆【感心し、たたえること】しているわけではないのです。感嘆しているとしたら、ちりばめられた星たちの運動変化を決めているかのように見える自然法則のことでしょう。天空に働い

ている自然法則は普遍的なものの代表です。いつでもどこでもだれにでも通用するものです。たとえば、人間がそのような普遍法則があると気づいていなくてもです。宗教裁判で、ガリレオが地動説を否定してみたところで、地は動いていたのです。それと同じことです。

この自然法則と道徳的法則を並べて見せたところにカントの心意気があります。この二つの「決まり」は、かわるものが違います。片方は天空ですし、片方は私の心なのです。それでも並べることができるのはカントが双方の大切な点として普遍性を考えていたからなのです。私の心のうちにある道徳的法則はただ私だけに通じるものではないのです。私が死んでも生き続ける、いつでも、どこでも、だれにでもありつづけるもののなのです。

カントにとつては、道徳的法則は普遍的なものでした。あるいは、普遍的なものしか道徳的法則ではないとカントは考えていたとも言えます。だから、彼は、普遍的な価値判断がどうしたら成立するのかをたずねたのです。究極の価値は「よい」ですから、カントは人間が何がいかに判断するとき、個々の状況に左右される感情に基づく決断を徹底的に排除する以外にありませんでした。好きとか嫌いとかでよい悪いを決めるのはもつてのほかだったのです。

普遍的自然法則は数字とxyzなどという記号で表現されます。これらは普通の人には無味乾燥で、だから出てきたらそこでおしまい、そこから先は読みたいくもないし、聞きたくもないという話はよく聞きます。ですから、日常的なものに汚されていないということもできます。それに対して道徳的法則のほうはどうでしょう。少なくともカントは言葉という記号で表現されると思っていました。そして問題は言葉という記号です。

カントの考える道徳的法則の一つは、無条件に（＝何があっても）「嘘をつかない」ことです。この場合は嘘をついてもいいとか、この場合はだめとか場合によって違うとすると、場合の数は無数にありますから、場合わけも簡単ではなく、要するに普遍的な命題【判断】になりかねるのです。普遍的でなくはいけないのですから、どうしても「何があっても」でなくてはならないのです。でも、私たちのところには、「嘘も H 」という言葉があります。私たちの文化では嘘が許されるのです。

もつとも、嘘を考える場面が違います。カントの場合、嘘はだめというときには約束の話をしているのです。嘘で、要

するに、反故^{ほこ}にする【約束などを取り消す】つもりで、約束してはいけないというのです。私たちの文化だって、日々の約束に嘘はやはりだめです。でも、えらい人が、たとえばお釈迦^{しやくか}様が、衆生^{しゆじやう}【すべての生き物。特に人間】を導くために、嘘を使われるのは、ありなのです。嘘という言葉の担^{にな}うものとして、何を考えるか、友人との約束なのか、えらい人のお説教なのか、これはその言葉を使う人がその言葉でイメージするものの違いということになります。もう少し広げて言えば、その言葉が使われている文化の違いです。そうだとすると、普遍的な道德の法則を語ること自体が無理ということになります。道德の法則はそれぞれの民族の言葉に翻訳^{ほん}されるでしょうが、一つの民族の言葉が、正確に他の民族の言葉に翻訳できるとは言えないからです。

「小さきものはみな美し【かわいらしい】」といった清少納言の「美」を、「犠牲^{ぎせい}獣^{じゆう}の羊が大きい」という意味から作られた漢字「美」で翻訳するのはそもそも無理なはずです（でも不思議に共通するところも出てくるのですが……）。

どんな普遍的な道德命題でも言葉で言われる限りそれぞれの言葉、そして言葉を担^{にな}う文化のおかげで個別的になってしまうのです。だとすると、国と国とのコミュニケーションなどというのは、もう根っから無理というものです。

a コミュニケーションはこんなに厄介なものなのです。そしてその厄介さは、ほかの動物と違い、人間が「もつと」をポリシーにしているところからきていました。これによって、ほしいものを広げ、その確保のために共同体も広まりました。その挙句^{あげく}コミュニケーションは困難になったのです。でも、ここでコミュニケーションを捨てるわけにはいきません。コミュニケーションが不可能になったら、「もつと」は保証されなくなります。

b とはいっても、見下すのでも見上げるのでもなく自分たちと同じレベルの生き方として他人の文化を見ていこうという試みには賛成でした。

c それでも大変な試みだろうなと思っていました。題からして、異文化理解です。自分と違うもの、それをどう理解するか、すなわち、それを自分の言葉にどう置き換えてみるかということです。もつと落ちていて、「異」とはどういうことなの

か、それをなぜ理解しなくてはいけないのか、理解できるのかなどという考察も必要だと思えたのです。それでないと、やっぱり、ちょうど大航海時代のヨーロッパ人と同じで、こんなに変わった風習がある、こんな変わった動物や鳥がいる、こんなとてつもない宝物があるといった、ことがらを書き上げ、大衆の心をあおり、ついには、見世物^{あづか}扱いするか、略奪^{だう}するか、絶滅させるかだけになってしまうのです。

d この運動はアメリカから始まったことと理解しています。アメリカ人もようやく反省期に入ったのだと納得していました。でも、そのさなかに九・一一事件が起こり、反省などなげうって、猛^{たけ}り立って【ひどく興奮して】いったのです。異文化理解などどこかにとび、自分が気に入らない国は、自分と違う価値観を持つ国であり、それは悪魔^まの国ということになりました。そうなれば、コミュニケーションどころではないのです。

e いまから数年前、イラク戦争の始まる前でした。やたらと異文化理解ということが言われました。大学の講義題目にも「異文化理解」が花盛りでした。他の人々の文化を、自分の文化と同じように尊重して同じように理解していこうという学問的な試みでした。これはある意味で当然のことであり、でも必要なことでした。他の人の、他の国の、他の民族の文化を理解すれば、コミュニケーションが可能になります。そうすれば、互^{たが}いの交流もスムーズに行くでしょう。

厄介なのは、コミュニケーションだけを救えばいいのではないということです。もしコミュニケーションだけを救えばいいのなら、それは簡単です。「もつと」のポリシーを捨てればいいのです。つつましく、いまだけ、ここだけの安全を図ればいいということです。でも、人間がコミュニケーションを大切にしたいのは、「もつと」を確実にするためでした。両者を両者ともに手に入れないといけないのです。

そこで、うまいコミュニケーションのとり方などというhow toものが登場してくるのです。それを読んで意思疎通^{そつう}が進むのでしたら、それもいいでしょう。この際できることなら何でもしたほうがいいのです。でも、気をつけないといけないのは、コミュニケーションは簡単にとれるはずなのに自分ではできないのだとは思いません。コミュニケーションは簡

単にとれるはずだと思い込んだのは、小さいときの家庭の気楽さが心の中にあつたからです。でも、あの気楽さは、古参者の、多大な努力によるものでした。そもそもコミュニケーションは、普通では、無理なことなのです。その無理さをどのくらい崩せるかの勝負だけです。

コミュニケーションは大仕事なのです。でも、そもそものはじめに、生まれたてのころのことですが、心配りをしてもらっていたので、意思が通じ合うのは簡単なこと、当たり前のことと思ひ違いをしてしまったのです。本当は、伝達し、伝達される両方が心配りをして、ようやく成り立つものなのです。とはいえ、人間として生きるためには不可欠ですし、そして通じ合えれば、楽しくも心豊かにもなるものですから、がんばって試みて損にはなりません。うまく行かなくてもとと覚悟しておけば、悲観することも、頭にくることもないはずです。

(左近司祥子『哲学のことは』より・一部改変)

【注1】 音声の単位で、単語をできるだけ細かく区切って発音するときの一つ一つの音。

問一 文中の A ・ B にあてはまる言葉を次のア・エから選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア だから イ しかし ウ それとも エ たとえば

問二 文中の C にあてはまる言葉を次のア・エから選び、記号で答えなさい。

ア 必要な イ 重要な ウ 余計な エ 理性的な

問三 — 部①「猿と同じくらいぶつきらぼうな例」とは何の例ですか。

問四 — 部②「それ」は何を指しますか。

問五 文中の D にあてはまる最もふさわしい言葉を漢字二字で答えなさい。

問六 文中の E にあてはまる言葉を二字で答えなさい。

問七 — 部③「ギャ」『逃げる』という簡単な話ではなくなった』とありますが、なぜですか。

問八 — 部④「コミュニケーションなんてそれなりにとれるものよねと余裕で考えていた』とありますが、なぜですか。

問九 — 部⑤「新参者の主張」とありますが、その具体的な内容を本文から八字で抜き出しなさい。

問十 文中の F にあてはまる言葉を漢字二字で答えなさい。

問十一 文中の 1 ・ 2 には対の関係になる言葉があてはまります。あてはまる言葉の組み合わせとして最も

ふさわしいものを次のア・カから選び、記号で答えなさい。

ア	1 理論	2 実践	イ	1 実践	2 理論
ウ	1 抽象	2 具体	エ	1 具体	2 抽象
オ	1 理想	2 現実	カ	1 現実	2 理想

問十二 — 部⑥「新参者であつた子どものほうに非があります」とありますが、なぜですか。

問十三 文中の G にあてはまる言葉を本文から一字で抜き出しなさい。

問十四 — 部⑦「コミュニケーションがややこしくなっていく」とありますが、なぜですか。

問十五 — 部⑧「この件」は何を指しますか。

問十六 — 部⑨「一番もののぐさな道」とは何ですか。

問十七 — 部⑩「普遍的な」とありますが、これを言いかえた表現を本文から十七字で抜き出しなさい。

問十八 — 部⑪「問題は言葉という記号です」とありますが、筆者はどういう点を問題にしていますか。

問十九 文中の H にあてはまる言葉を答えなさい。

問二十 ―部⑫「清少納言」を作者とする作品の冒頭文を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「むかし、男、うひかうぶりして、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり。」〔伊勢物語〕
イ 「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」

（『枕草子』）

ウ 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」〔土佐日記〕

エ 「やまと歌は、ひとのこころをたねとして、よろづの言の葉とぞなれりける。」〔古今和歌集仮名序〕

問二十一 文中の段落 a e は順番を入れかえています。文章の意味が通じるように並べかえ、記号で答えなさい。

問二十二 筆者はコミュニケーションをどのようなものだと考えていますか。

二

次の1～10の文中の（カタカナ）を漢字で書きなさい。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 兄は（テンケイ）的なスポーツマンだ。 | 2 （トウロン）会に参加する。 |
| 3 病人を（カンゴ）する。 | 4 新しい（ケンポウ）を制定する。 |
| 5 和紙で箱を（ホウソウ）する。 | 6 休み時間に（ザツダン）をする。 |
| 7 彼は（ハクシキ）な人物だ。 | 8 （トウブン）の多い飲み物。 |
| 9 くわで畑を（タガヤ）す。 | 10 ほおを赤く（ソ）める。 |

一

問一

A

B

問二

問五

問六

問三

問四

得点

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

問十四

問十五

問十六

問十七

問十八

問十九

問二十

問二十一

問二十二

二

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

す

める

↓

↓

↓

↓